

【 1 】

氏名	水野浩一 みずのこういち
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第83号
学位授与の日付	昭和48年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	SOCIAL SYSTEM OF DON DAENG VILLAGE—A COMMUNITY STUDY IN NORTHEAST THAILAND (ドーン・デーンヅ村落の社会体系—東北タイのコミュニティ・ スタディ)

(主査)
論文調査委員 教授 池田義祐 教授 羽田 明 教授 今津 晃

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はタイ国東北部の稲作農村ドーン・デーンヅ村の実態調査(1964~1966)の資料にもとづいて作成されたものであり、本文と参考資料とからなっている。その主な目的はつぎの三点に要約されうる。すなわち、第一に、調査村の経済、社会、文化の諸相をモノグラフ的に記述すること、第二に、個々の社会的事実を全体の文脈のなかで把握しながら、当村の構造的特徴を明確にするとともに、その相互連関を分析すること、第三に、以上の分析にもとづいて、調査村の全体的構造にかんするモデルを作成することである。

調査村はコーンケーンの南方約20キロの地点にあり、近年、交通手段の発達にともない次第に町との往来が活潑になりつつあるけれども、まだ、かなり伝統的で、等質的な小社会の様態を残している。さらに、この村は東北地方の農村を代表するものとして、不適切な様相をもたないし、規模の点(戸数132軒)からいっても、単身で村落生活の全領域を覆うのに手頃な大きさである。調査は実質一年間この村に定着して行われたが、それは集約的方法と参与観察を特徴とする総合調査、すなわちコミュニティ・スタディを目標としている。本論文の内容構成も、その性格を反映して、第一章「村の位置」、第二章「経済生活」、第三章「土地所有」、第四章「家族と親族」、第五章「階層構造」、第六章「政治」、第七章「宗教的信仰と慣行」、第八章「主題と格言」、第九章「結論」の各章に分けられているが、最後の章では、欧米の研究業績を回顧しながら、自己の分析視角を明らかにした後、構造モデルを作成するという観点から、各章の記述的分析を総括し、あわせてタイ村落研究の将来を展望している。

ドーン・デーンヅ村の全体的構造は「屋敷地共住集団」の存在を無視しては理解しえない。この集団は数家族から構成される親族集団で、親の家族を中心にして、子供、ことに娘夫婦の家族が原則として親の屋敷地内に居を構えることによって形成される。構成家族は日常生活、消費面、世帯面にかんして独立の原則を貫きながら、他方、農業生産の面にかんして、農地、ことに水田を媒介として結合し、相互に共同耕作の関係にある。この場合、農地の所有者は「共同耕作の経営主」ともよばれるべき親の家族であり、

子供夫婦の家族は、その農地で働き、主としてその分け前に与ることによって生計を維持する仕組みである。ただし、これら「農地を所有せぬ耕作者」たる子供夫婦の家族は、相続を前提としたうえで親の家族と結合しているので、親の死後、あるいは老後において農地が分割され、それぞれ自己の相続分に与かると、かれらは「独立農家」の形態に移行するし、他方、「屋敷地共住集団」自体は結合の物的基盤を失って分裂する。したがって、この集団は世代を超えて存続するものではなく、一代限りの、一時的な親族集団である。

この「屋敷地共住集団」を分析的にみると、第一に農業生産上の協同関係、第二に集団の形成、発展、消滅の過程、第三に構成家族の社会的地位の側面が見出される。そして第一の側面は、共同耕作の慣行をつうじて土地所有の形態に規定された村の経済構造と不可分の関係を持ち、第二の側面は、妻—母方の要素の濃厚な双系制下における村の親族構造と密接に結びつき、第三の側面は、家族周期の発展段階上の家族の形態と呼応する階層構造と深い繋がりを示している。したがって、これら村の経済構造、親族構造、階層構造は「屋敷地共住集団」を中心にして、相互に連関しながら全体的な構造を組立てていることになる。そして、こうした構造化にもとづいて、村のリーダーが選出され、その指導のもとに集団としての村の活動が展開される。かれらは仏教的色彩の強い文化的価値の具現者でもあり、それだけに一層強く村人に尊敬されている。ただし、指導者の権威はそれほど制度化されているわけでもなければ、また、かれらのみで特殊な集団を形成するわけでもなく、その影響力は双系的な親族組織の通路を経て村人に及ぼされる。このように「屋敷地共住集団」は調査村の全体的構造の中核をなすものとみなしうが、さらに、この集団の形成、発展、消滅の過程は家族の周期によって説明される。その意味において、ドーン・デーン村は「屋敷地共住集団」型の村落構造をもつといえるし、また、家族の周期そのものが村の構造を示しているといってもよい。

もちろん、そうはいっても、以上に略述した構造モデルが一つの類型とみなされうかどうかは、経験的な次元に属する問題であり、東北地方や他の地方の村落、あるいは東南アジアの他の民族の村落にかんする調査が必要である。しかし、東北地方はタイ国でもより伝統的な生活形態を残していること、また、調査村に見出される様々な構造要素が他の地方の村落にも存在することなどを考慮すると、さきの構造モデルはタイ村落社会の一原型を代表し、それ以外の村はその変種ないし変化として把握しうる可能性が高いように思われる。事実、たとえば、北タイの一村落到んして、この見解を支持するような事例を挙げ、変化の過程を仮説的に説明することも容易である。

以上、本論文の最も重要な成果を一言で表現すれば、タイ村落社会の構造類型の発見ということにつきる。かつて、日本の農村について「同族型」と「講組型」、あるいは「家格型」と「無家格型」といった概念が提唱されたことがあるが、本論文で示した「屋敷地共住集団」型の概念は、ちょうどそれと同じような問題をタイの村落について試みたものといえる。しかも、こうした研究は、欧米の学者によるタイ村落の社会的、人類学的調査研究の成果に見出されないものである。

論文審査の結果の要旨

タイの農村社会の構造は、従来、文化人類学や農村社会学の領域において独立自営農民をその主要な構

成単位とするルーズな社会組織であると見なされている。この見解は、1950年に *American Anthropologist* に発表された J. F. Embree の “Thailand—A Loosely Structured Social System” に始まり、その後、最近に至るまでタイ農村社会の文化人類学的、社会学的研究を方向づける有力な学説であった。

著者は、この見解に対して、タイ東北部地方の農村社会について、一年有余にわたって自ら精密な実態調査を試み、ルーズな社会組織であっても、そのなかに独自の構造モデルが把握できることを提唱する。著者は先ず、タイ東北部地方において多数を占めるラオ系タイ人村落の一つであるドーン・デーング村を有為選択法による典型法を用いて選定し、同地方で代表的農村と認められる当該村落における経済生活、土地所有関係を具体的且つ詳細に調査分析し、稲作経営を主体とする農業の基盤としての土地所有関係を綿密に検討した。その結果、農地なき耕作者と彼等との共同耕作の経営主とからなる独特の農業経営形態が屋敷地共住集団という親族集団のもとで存在していることを見出した。この親族集団は、すべて妻＝母方的要素の極めて濃厚な双系の原理にもとづいて形成されて居り、農地なき耕作者は、妻の実家の屋敷内に居住し、実家の耕地を共同耕作して居り、妻の親達がこの共同耕作者集団の経営主であるという、所謂母方居住制に近い形をとっている。しかしながら、この屋敷地共住集団は永続的な集団ではなく、娘の結婚後に形成され、親達の死亡とともに消滅し、親達の土地を均分相続した娘達の家族がやがて独立自営農家となり、更に新しい屋敷地共住集団を形成して行くのであり、家族周期と対応する流動的、一時的集団である。このように個々の屋敷地共住集団は個々の家族周期とともに生滅を繰り返すが、農村社会においては、伝統的、恒常的に存在しつづける集団であり、同時にそれは農村社会の階層構造、政治構造、社会的威信やリーダーシップ、宗教、道徳などの社会的、文化的諸側面と密接な機能関係を有する社会構造の中核と見なされる集団である。

著者は本論文において、上述の機能関係を村落生活の現実に即して極めて詳細緻密に分析検討しており、その総合的把握の成果において、これまでのタイ農村社会についてなされた *Community Studies* の域をはるかに超えているものである。

かくして当該調査村に見られる屋敷地共住集団型は、タイ東北部地方のみならず、東南アジアの他の諸地域についても、双系的親族組織の存する農村社会であれば、たとえ直接的な適用が困難であるにしても、これらの社会の社会構造を比較するための重要な手掛りを提供しうるものと認められる。

ただ、文化人類学および社会学における機能主義の立場をとる著者は、この調査研究にあたっては、現実の機能関係を重視する反面、やや歴史的展望に欠ける憾みがあり、この点については、単に機能主義の立場にとどまらず、その克服を旨として今後の研究上における精進を期待するものである。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。